



繪本孝感傳

四

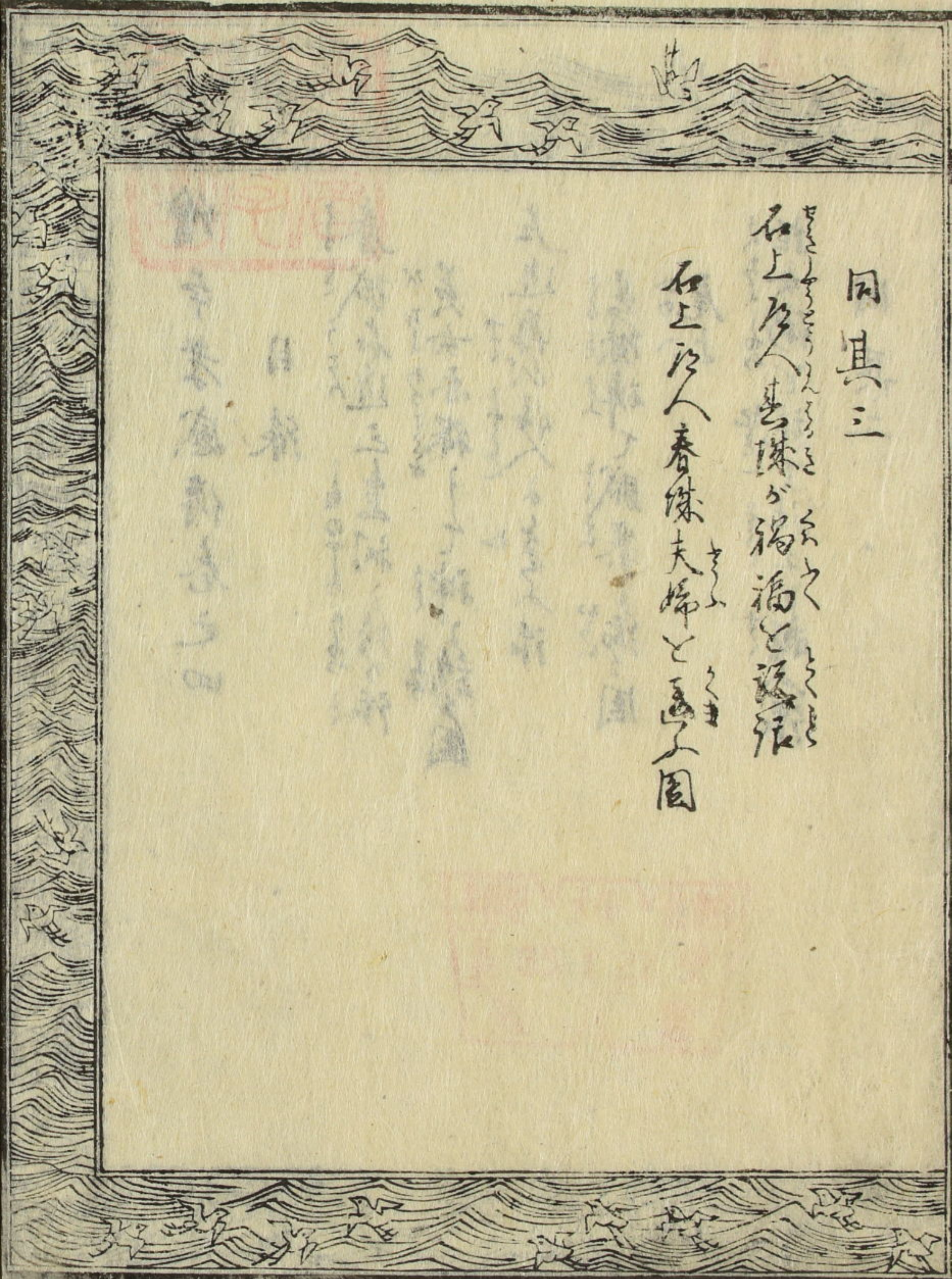
~ 13
3581
4



同其三

石上乃人其珠が福と云

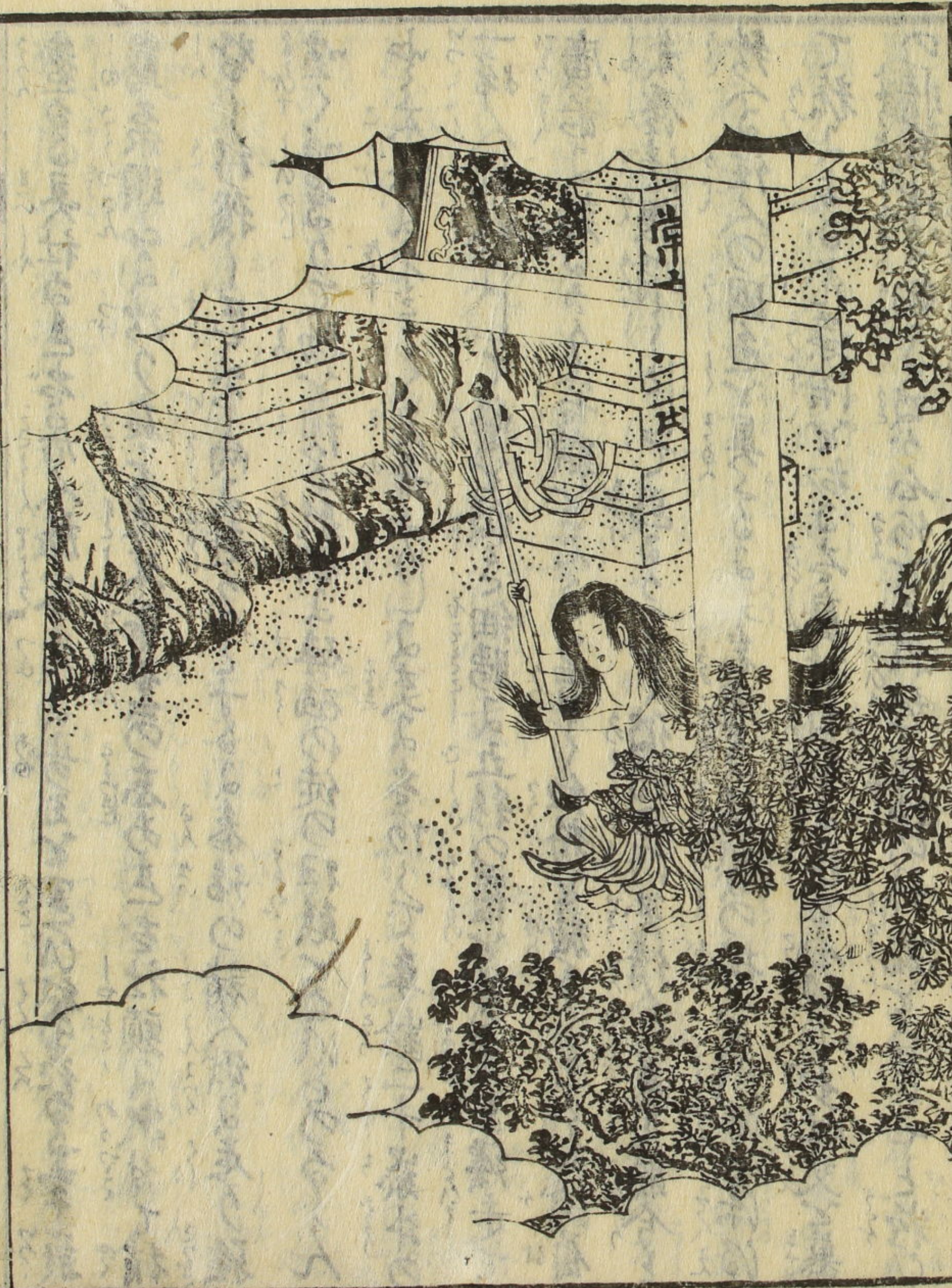
石上乃人春珠夫婦と云



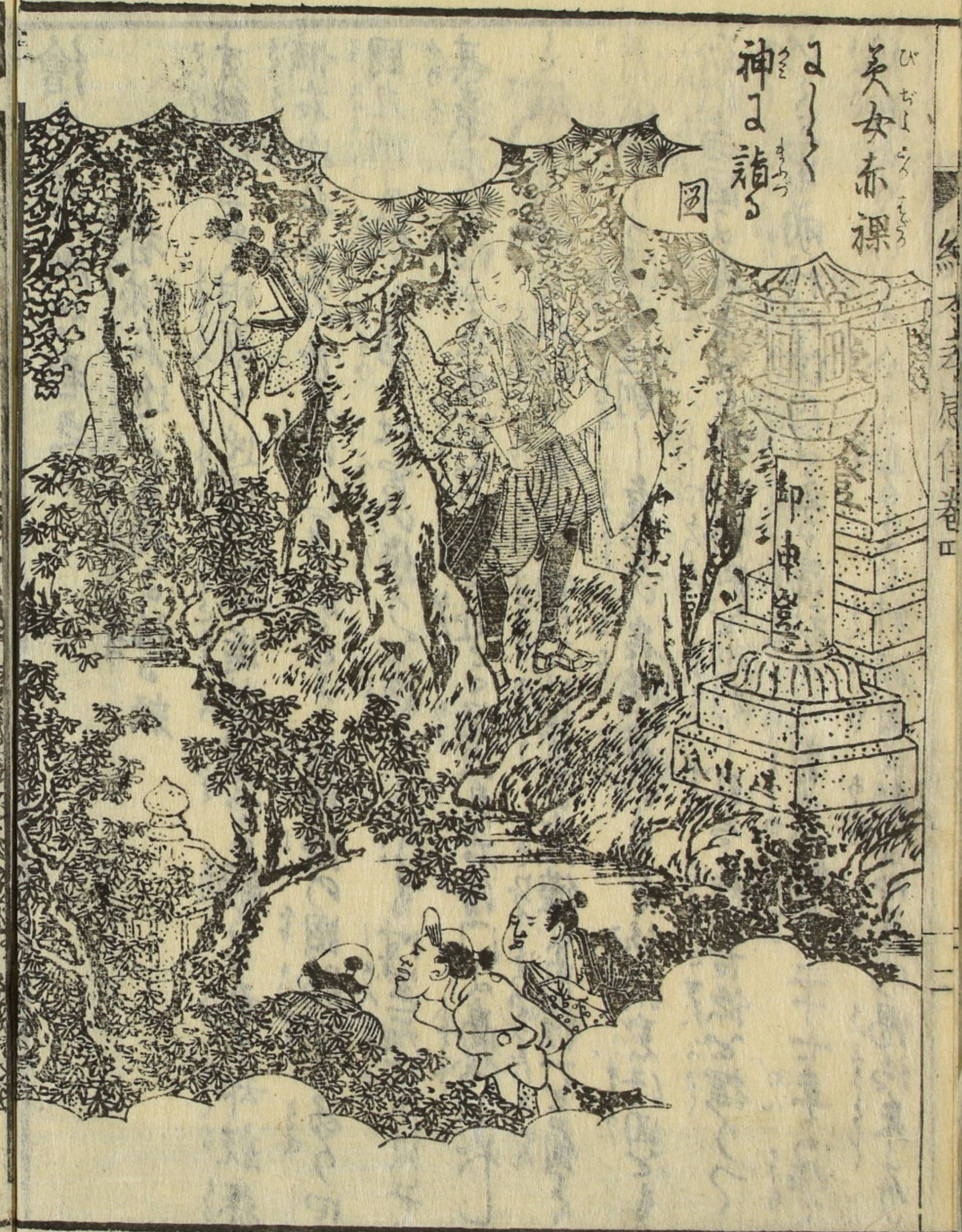
繪本考感傳卷之四

春珠右近之宮祠又傳之語

才能の士々時有く此道に亦造物の忌は觸るが居る却就春
 城右近は兄九郎右清門より別まゝ尚俸後之困勝はあり
 國九州は能く善く仕官の便りを求るゝ人も時運は命はして
 其素意とほご一先小園又赴る兄九郎右清門は高議士とし
 と候は高居と取収り家計と鬻て御費は充備は色紙と扇と
 前途せしが流石住則し意里の名孫畫がごとく御次郎汗圓とも
 欲は南園又名多るる神佛刹と巡行し或は名取古松と擲つて
 ゆく三考明神の境内はあり南社と性首崇神帝二十七年又始て
 鎮座ありしよん今又あるまで神威目又勅は臣の偶修年なり



美女赤裸
 神子詣



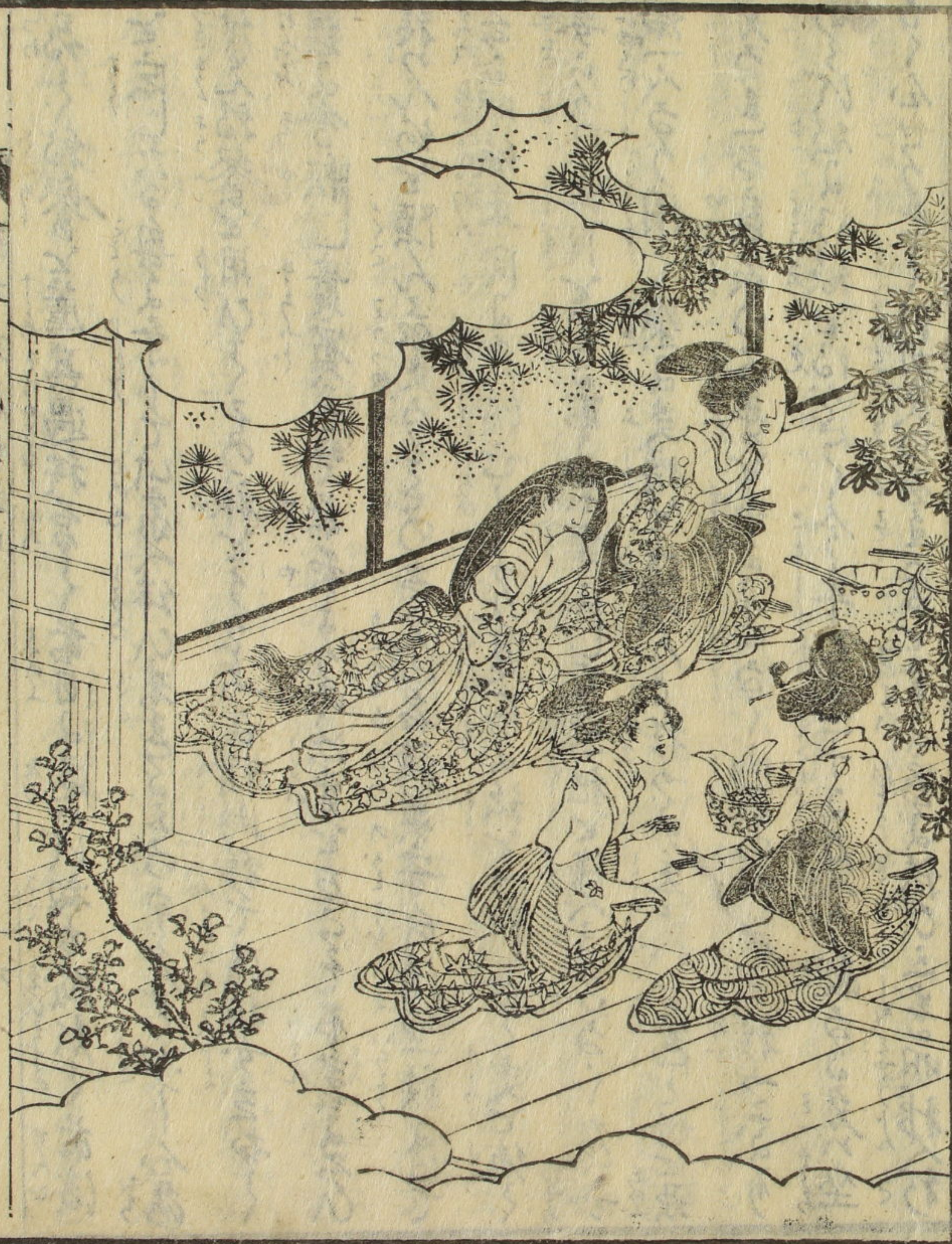
盡るる其社るるを居人旅客者より歩くとまじり繁花の幸最
 鳥家頭より次り右とえ来青雲の志あり社頭より敷付て稍
 暫く行預へ已に中向より赴くとするも赤流の諸人俄より走り強
 喧く喧嘩りて物と親る形状は碎礫の徒の粗態とるはるるん
 中本位より才より足長けりし又又老阿うで年齡二十歳半の
 一婦人裸体にして髪と被る細腰は五彩の羅と裁重も纏走て
 廣面又詰るるり容貌と見るも曾く紅粉と施さるるも蛾眉
 朱唇清眼媚くとして画るごとく彼流の巧笑倩兮美目盼兮と
 然るる佳人の國色と具するも又老層は緑髪を掩る風流と添は
 て粧よよる花蔭浴とあるも真と目下より視る心地は少壯艾と慕
 の情腹中より初と彼が公何とや我れ我れ是れの新語とるもとやと粧ひ

目赤く思へば諸人と共は彼婦の依り従ひ門前より出をき一の系
 香より母髪を髪雨と走りゆく彼婦人と傳を皆奥の一角より入
 め右辺を麻情尚止に彼が後流と稽く今一返見るべしと合聲の
 一言より依り一語の濁濁と流く猶時と稽せし又彼一室より希乃不
 發者有りて右をよの我の至母の巾敷いき今日も女の形預よよ
 甲よりけ流社へ訪るる麻林の形耐と取もやし居いおろし見えし以
 是の御伴もよく流勢陶よもいりんの巻を我くはけ方にてたよ此徒
 語ありししやの流のよのいりりと進たき老右をい巻の心地して何
 の名も及ばず髪は後ひてまよ一間より知り度中と見えは至母と
 思ふに脱はは十よるたきど葉花の影の松徒るるは先の婦人の
 新の風流の衣裳と看流し中葉の嬌態と見してそ例は摩し

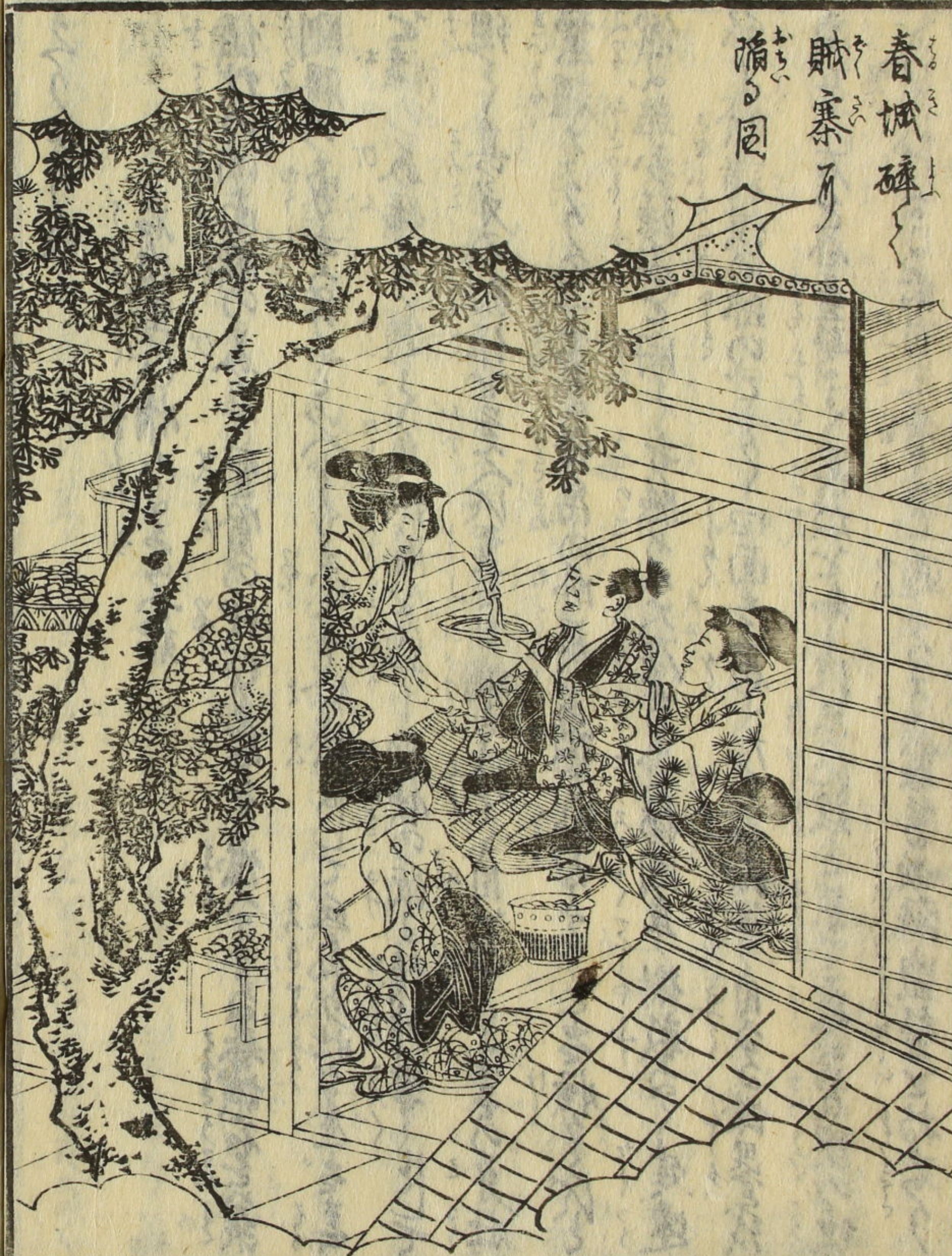
其他許多の侍女十分の粧て座上候しや居るるびりふまき傳
 同遊仙客も登りしうと申くは言もかびらなど面を頼りしを母
 其様を察せし事笑と合せて右をよみ歎ひ悲し道なき事り又位
 者よて名と相しぬ又是るるを隈しとて秋女あり一樹の影も富り
 何の涙もほもけ世のうぬ焚りうと申せは何れも落しうへ襟衣披
 て一色を懸くとも有合ふ杯は自一傾もくはせは右をも他を食
 又合は付杯と候も彼方け方へせしむるるがえ来なきありて右をよ
 破せんとい計りあるまはるる酒量もなき右をよ分とるる
 詠と貞入客候は日の暮るるもおそき途終り破例も茶後も老び
 肺より血を妬女もよ今と傳つるを惜しくを意ひし事をもり居
 たる僕後との肩輿と推すありて母子及び右をよとよせ何方たるる
 之りきりぬ

右近再び情人よまよふ結

儀状の酒南威の美を愛賢の戒むるなる流るる春城右をよ
 剛賜の勇士ありといども未二十餘歳にして血氣少壯るるを喜
 と懐の美婦あり遇く夏織鴨と過し劇飲の酒は精神者として
 總く其身の初作とそくは聖日日爛く始く月と開くはその身壯
 繁耀をうりの一室は殊帛の外具と被て外ありて此を怪るるは
 俄に靴が障子と開くお除けは又履き堂掃閣亭榭教るる建連
 糸一杖諸候の郎のごとく四面を遊むたる山嶽保自らの珠翠装
 又せり右をよを羨望し其故を知りて只茫然と呆て更な表現の境
 とそへはるる昨日の暮りて遇するる装等吹跳盪盤と持あり

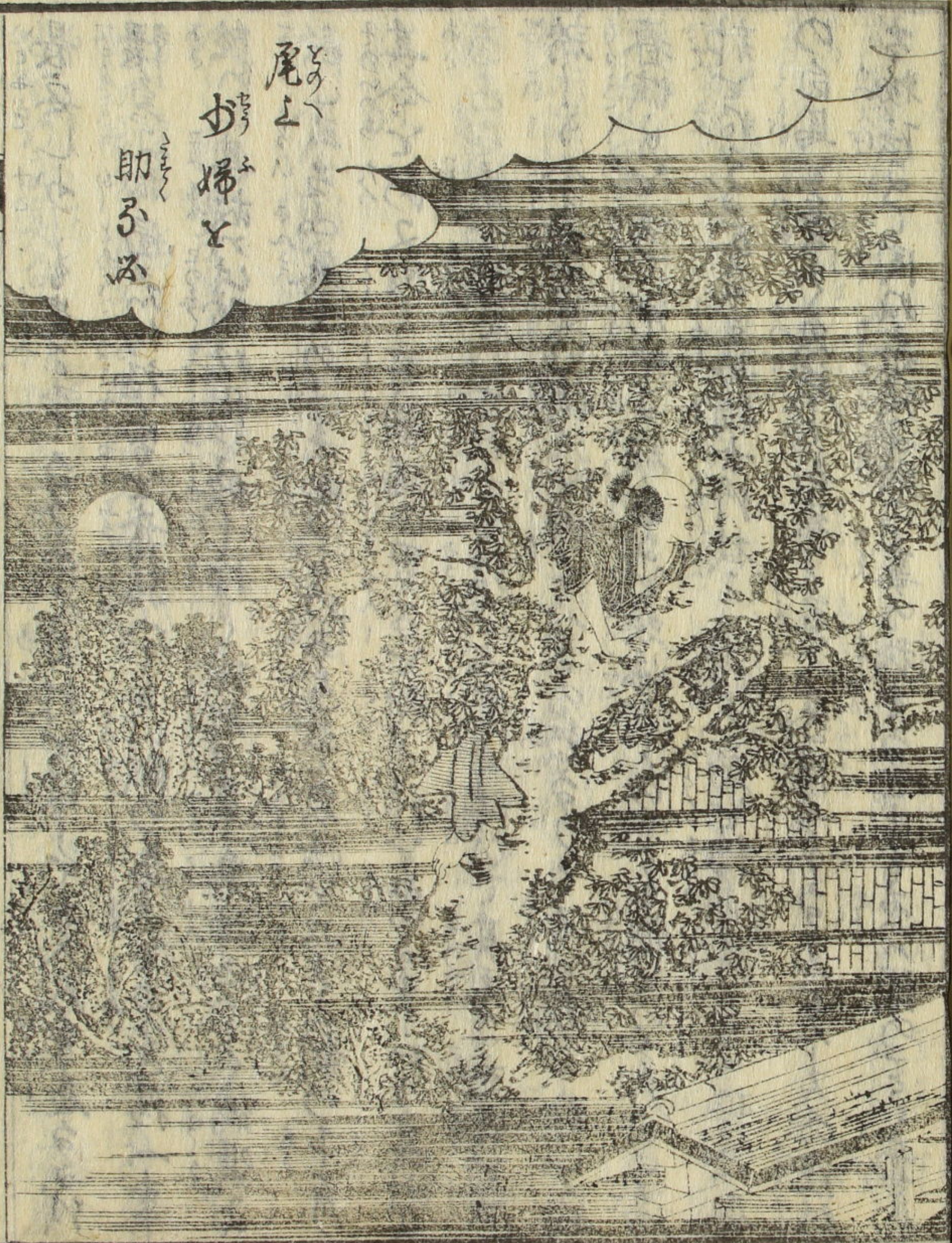


春城碎
賊寨
滑の目



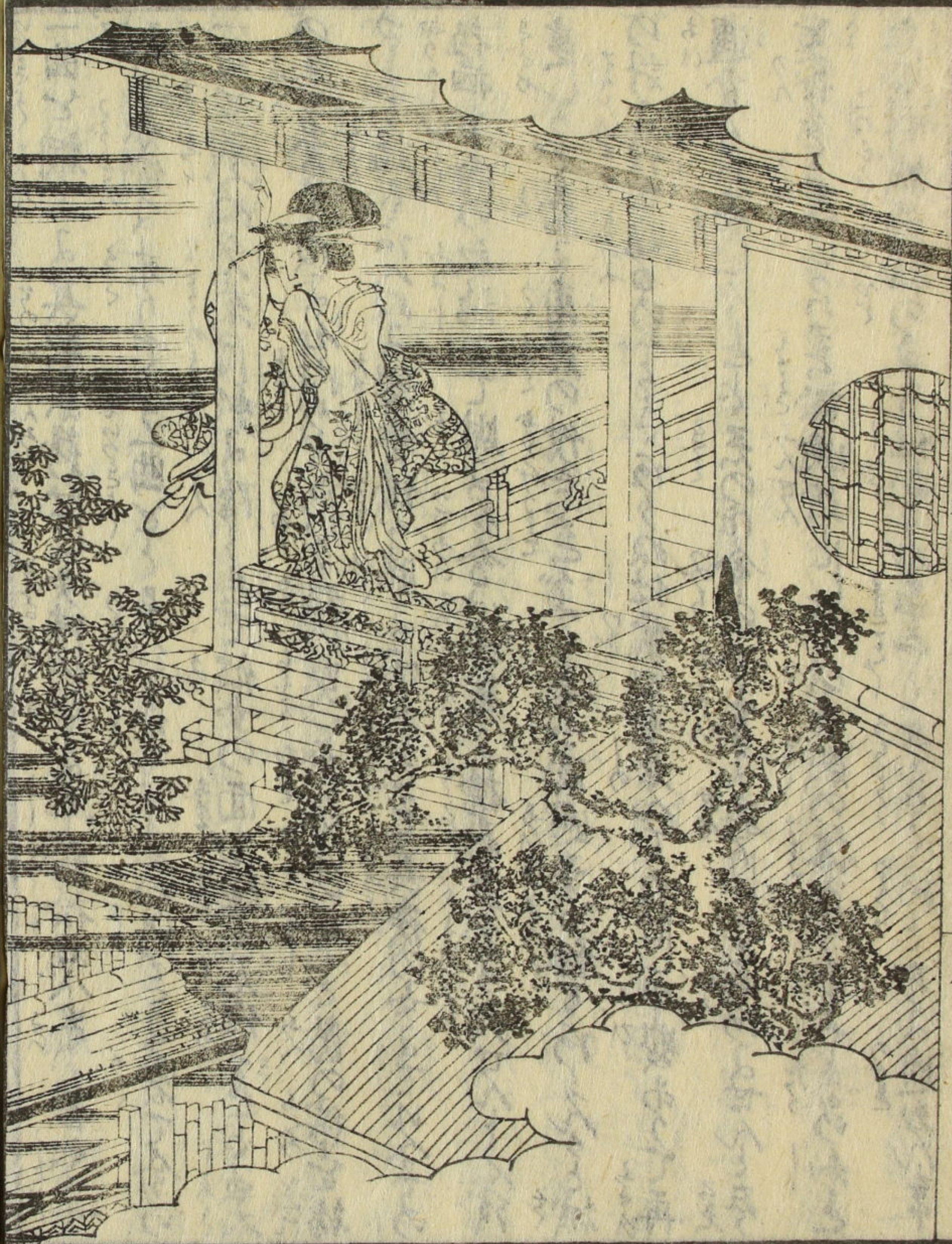
為ぐ初誓と薦其遇後骨く前日又遠ハバ叔を致致く前後
 と忘じたる身又素とてい家へ伴ひ来るその中んとあり公
 付え初誓を用ひくその林とうくつ又指附移て後栢女を
 親又舎歎し貴賓又多て前夜より次男を左こそ不慮又公
 孫りん物を隠ん承受るその志え山名陸奥守氏清の一族はして
 去る明德年間日氏清亡しより是又公とくし世と文と絶く
 安らり又年月ととる不又不幸はして宗祀と絶へるるくた女
 環一人り周く渠又交婚と連んと移るる年及しと世と絶
 牙るまご自家の子弟とある又由るく山家の村長を影つて
 あらば故よ好縁とゆぐく今年已又二十又及ぐり親るる身ハ坐
 るく公せりてく日交の面あると幸よ又誘ひて昔明神人形

誓せし神徳の著るく又又去るく赤繩の周縁るるや不詳も
 貴客よを奉りて是女が痴情一方るるば形と告あすとも
 容易許客強ふはじととや強又酒と初親く棲り伴るい
 たりし志專け奉と告んたより初人形強し山家の宿長と
 女が魂と厭強はれ去け廢居又止りて世を度し移入く他去るく初
 一ふたを止強と且恨ひ假令強成るりともけ強屋又棲え来
 るむ而の更婦人と妻又俱く生強ととて義家の宿も初
 道しや心裏又高置して主母の厚情を謝し真身のを歴と
 補者く志よ以誓せし栢女限るく喜ひたあはるまの極度と
 今夜花燭の終と結ん縁其也し移入く浴梳のよりあはるまて心
 と用ひ強く彼方よ引入ぬ右をの毒屋外はあはる一財と送るるこ



尾上
少婦
助子必

曾不... 傳... 四



絲... 傳... 四

八

最後しかりも患の幸なることと目打を没してお入ん幸なること
 環多の押通天の程勇と奮強ふもけ賊の毒もと入るは小幸
 能いし其故に賊妖術と修しゆる限る幸鬼神のぞく偶染よ
 敵し武志山寨とのふまあることのおまご忠法とびく一剣の下り
 其命と断又内々容貌端の男と斬く神とある幸つり其時よ
 南と北と東と西として仕士と修る山寨の体ひて其用は充養と懸
 誘しも今夜四更の法法と修るべきの夜なりと海と香と若しえ
 春城身と囂で湖中は福あると思悔ると人も禍とのうらま
 計とゆるる事よ主母相女竹杖は雄雄の鶴と修り片もは勢入一足
 の白馬と幸く夜修とお入り美人真修のうらまはせよりの夜話
 志物陰にて固ぬ系級は賊の妻の松さるせとも東の環のぞく奮養と

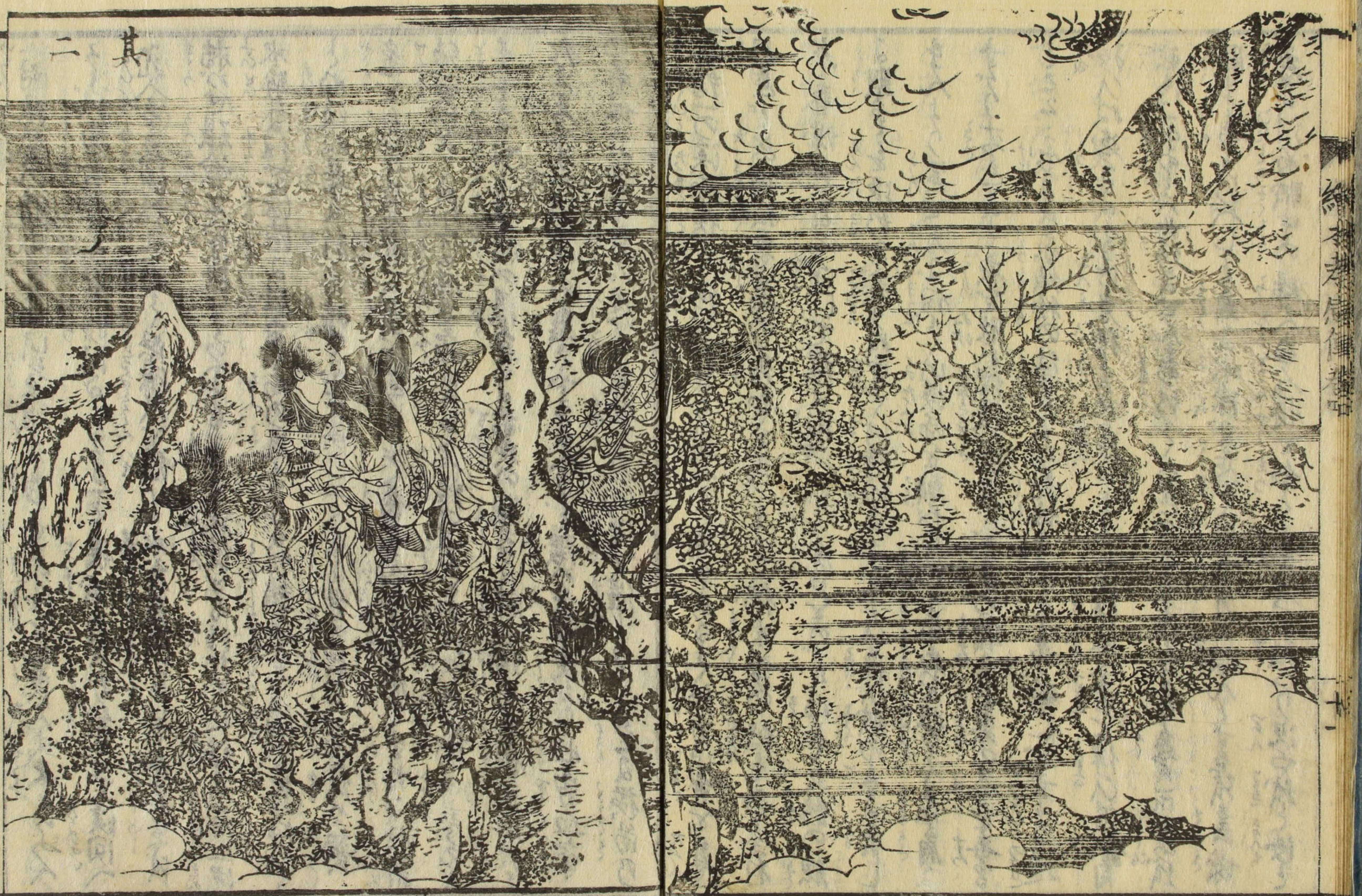
其まゝのそのまゝに悲痛と刀さるる思ひに周く今宵の疾禍と抱ひ
 泰らに疾けるよ系あるの徑は猶く北通を何方までもおまは修
 と見張るるある時急よりの鶴と撫修るまゝ免難と近き修りん
 時によ更なるは一刻とあやまらざる其甲斐修りしとくく備せざる
 隙をゆるりと環と腋は挿行よは竹杖と抱るがらも綱をゆるり至
 母の恩情に再会は謝さるしとある徑はお向ひ一人よお修り
 あらふ
 相女術と絶る事と壯士と救小結
 ゆく春城左邊を至母の教は修り一徑は猶盤根煙石修ひまゝ
 絶と令く返るる馬とえ末駿足にてゆしも濃滞は能驅るる事
 地とゆるはるる捷速なるるの宛も疾風の甲はあるがごとく須臾

又救重の山岡を過り少しお廣けたる祖たる隙む附紙の月を照る
 一圖の黒雲中より鳥鷹地は掩れる右をすはるこそと色り
 難とらひ摺る中を掃く撒くくは怪雲夜雨降り分彼難と中
 色よと見え難い中又掃くもく叫び唯雄ともよあ隙とあり
 て地はあつると色しく怪雲の何方ともなく消えて月の光再び
 ゆるり右を台を掃く妖術の側るぐりぐるり又馬とをん
 とするよ其身環と抱く岩よ又坐し今までなり強は又一箇の
 紙ると化し風又執りておあそり春城再び一巻を噴板はる母
 の奇術よて承くこのあまで抱ひ出せしうと更なる情は越トま
 より怪く衣袖と奪ち環とを携りて去るもあうぬ幽碑の山
 間を曲る杖の陰祖と凌ぎ月の光を使て十町斗下りし

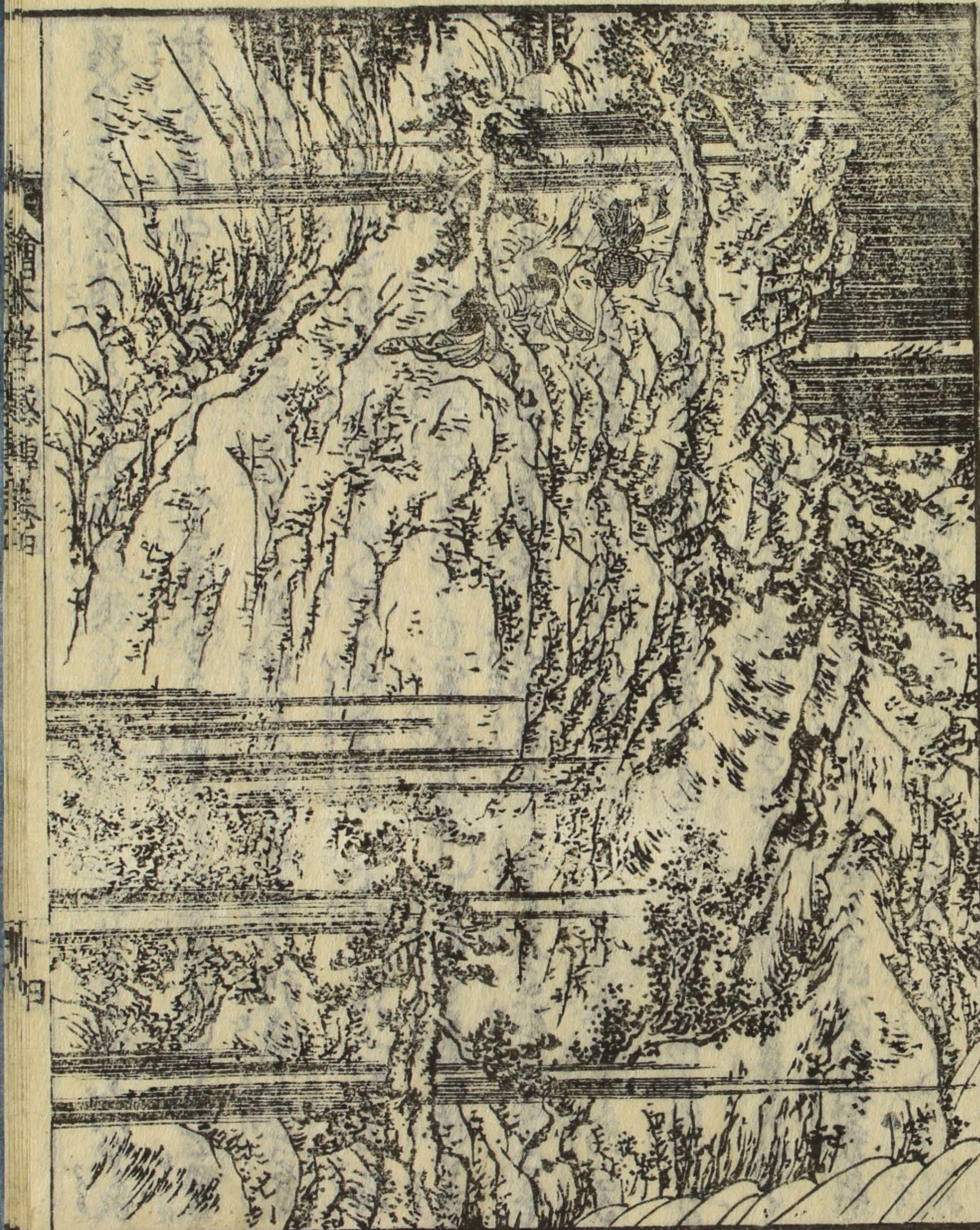
長踏一の溪流掃く色と影より越へる橋やあると彼方け方と尋
 回ると只樹枝鳥囀の音あたるのよとて楊木葉の夜もあはれ
 を春城急なる通して環よ對ひ承く虎とのかまゆり又龍の腹
 又嬰聖を退却る夜りぬ空けけ輝地よさまよひ再び賊のよよ告し
 まんよりの星と天よ何とけ溪流を越し汝は夜を携りて承る
 すがりすよよく夜を脱し環流とらし一夜の情は首幕の今を毒
 とこそお水よよが飯初の仕事より死地は偏是事せしと幸なり進
 移ひぬあるよ今所を獨るよ色しとるハけ溪流(赤を伴ひ移ひ自
 然流るあはれおれよせん赤影くあききこそきむも海(西国
 晴一赤らびしと色よ水際よ走く脱し身と扱んとする城妻城
 急よ引ぬ賊中の婦人者人情となく赤二人を殺り況や我れはと

其二

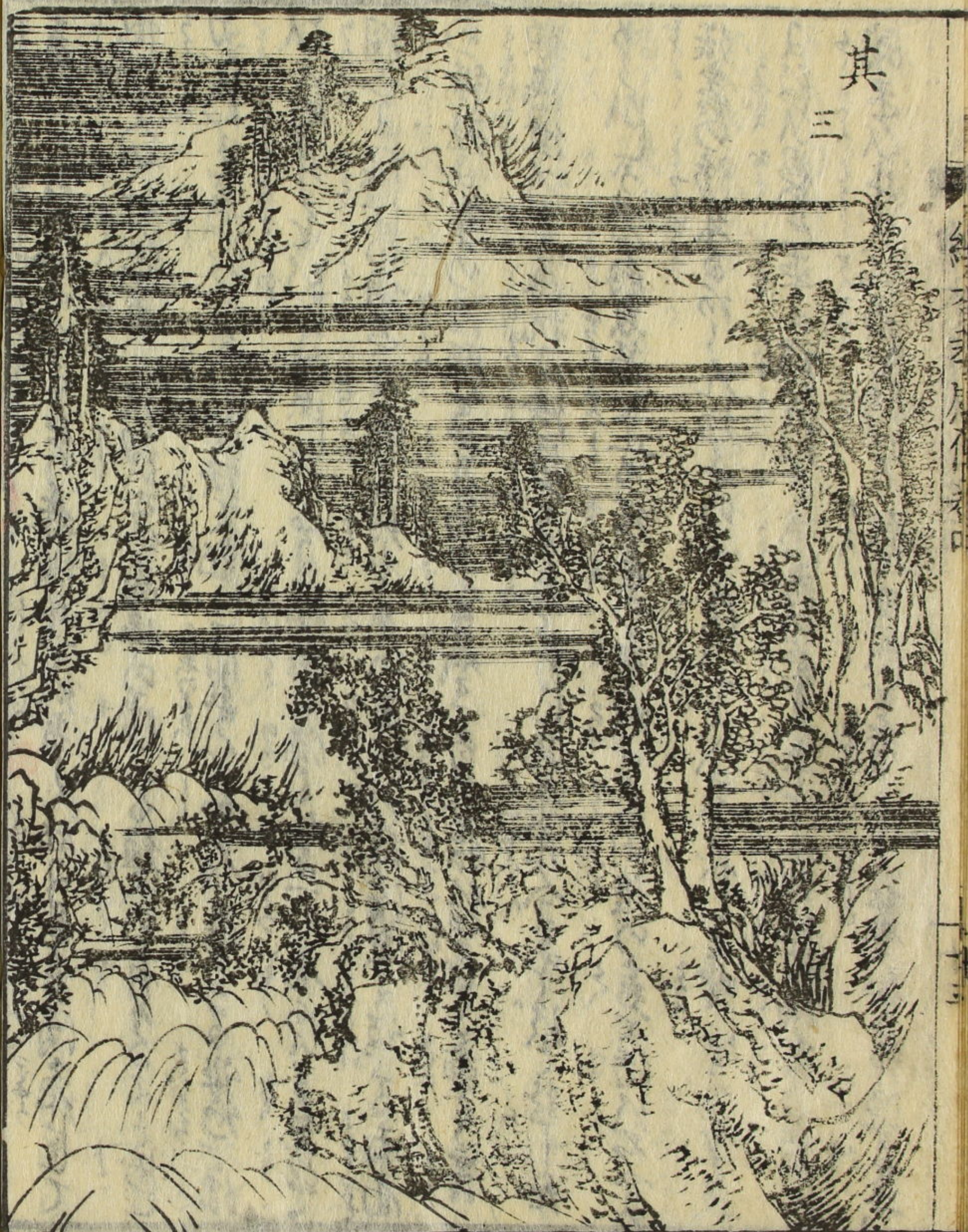
卷之二



山崎闇斎



品第
卷五
第廿五



其
三

品第
卷五
第廿六

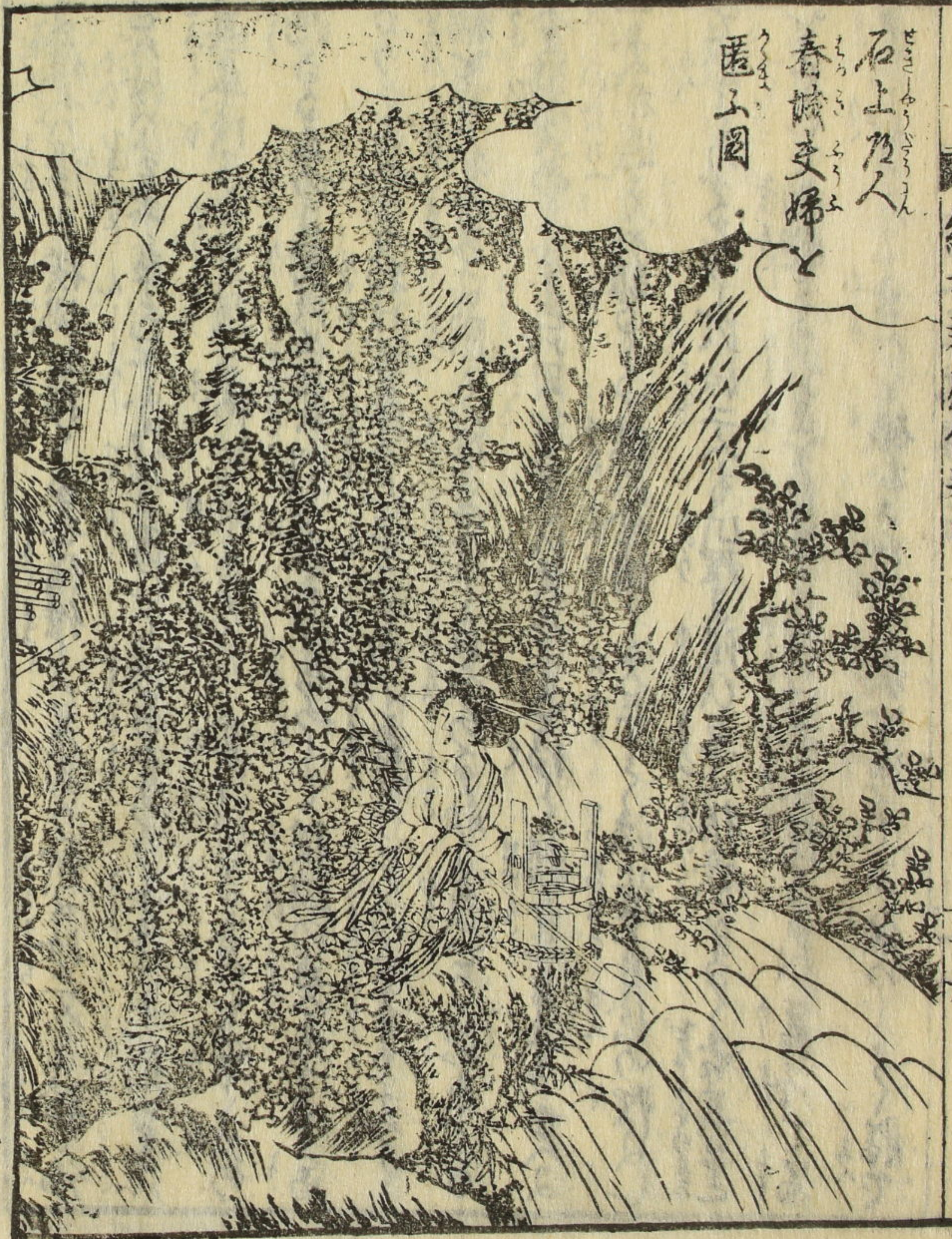
強人と若き清きまを老翁熟視く仕士の春城をよめりばや
 社より勝山より高居せし石上道人あると早くも見立しう衣を替
 て臥と巻く見ると見立はるう一衣を替りて一衣を替りて
 て師の善信と同奉らず何ゆへ人形なる人後と後と隠し路や老翁
 芝雨と笑ひ笑え強世の志ありて官録と辞し世不と暮人情を養
 自ら石上と号善く里方と漫遊しけし山素石山と名する石原を遊
 遊ひ其の持くもの雲の例と終けけり山中は静く最深く過る
 地にて樵夫の徒も若く通ひぬや旅者の志ひ入るるよ何れにせよ
 伏軟弱婦人と伴く事なき事なき子細あるや右を是とせし
 初より伴くと細く話さしる人愕然として驚きけは漢の彼方を
 性善より賊の彙とありて巨盜魁賊交信と隠せりるる又二箇の奴

賊ありて許多の劫を後協と分て四方の海より捕りて
 付の原にて運漕の貨物を奪ひ又空しく精りの遺法と偽叙とを
 死せし人と教里の介と教次女が偏く老翁に賊案あり若婦人の
 助る人々二人の性令に彼鶴のてくるん今昔と遊りて人々も
 氣甚疲勞たまはるく老翁魁木客と感するもの畏れんまが我
 層は遠く寛く精神を養ふべしと懇々示すまが志誠再其の心
 と成して深く恩と謝し終くけは還りて又体の芳さを真める
 石上乃人春城が禍福と後話

泉酒の葉と麻朱門の扇と婦人陽士のる風と老翁ねせ衣を振
 去初は果実と喰ひ善く潤水と掬く僅く飢渴と助事及人の層は
 還るる教目と終く此精神の爽るるを是しる水く清閑の地と河に



石上乃人
春城支婦
匿山園



疾とて守るべしと類ふふくまを環涼く因と耕て整て教
 海の背をもちと種とて出さく及人等と苗め山及山守
 るりして二歩もをむる能はぬ嫩弱の婦女弱者は傳ふ本は河次
 我一の懐とてと懐日しては裏と秘文と唱るとをせし
 登の後の溪間より教足の又後首轟と編くゆつたる一の轟を携
 事り及人の前より列く物法は及人をもて以て指揮すきお衆様其云分
 解し衣を環と競の中へ捲入擔て席をわしより極もるる山間を
 傳ひ或を寄と走り溪を涉り其坐るるの駒馬は鞍く平地を走
 るるてく霧の中の極るるを席上は座するは号るるげ影るる
 日本日して一の山間より霧と中して前夜を指さく一糸は春機敷
 老人置と付するるるんと公在く環と抱て影よりあると階く

衆様を被影と携へ荒うてくは山奥へとてまきりある

丸毎の客舎は環父母はまよふ結

初て春味を込き不圖も石上及人の脚と受て許多の談話を易
 くと甜色衆様の指揮せし石位と分て又りるる捨町計て一の
 大羽はちまき一羽の旅客蕉の言よりより来る春味を付く
 何の山も一回の旅客をくは怪と足下り何人して何方よりけ小ま
 事り影ふ是こそ南國の名をる衆は山るとあり影はやと口く
 器りる初ては月影勢を口々の影くありるる金比羅具社の秘次
 の道ちあしく石上ありし刃の半月とて以國と隔しけしは本家
 幸道人の神意衆人の測知る本はあはは是係南社具神の冥冥と
 相人影くあはるるべしと伝心更は行は衆一審とるるるくやあること



其二

旅客の後又後ゆく山より又攀登り社殿と相して牙の音息と共
 ひ爾後の安穩と懸又杉整し来より同國を毎又旅舎とせり
 始と連日の辛苦と休め二人相對くまは又縁の足るを収ひ又
 老親者の後しりしせるの稍時移るまでお行の積と睡と催んと
 する時協の襖と用とて一人の老親をたてし申すの下のり
 まで其るも人の名は環とてやとやとわつと聲と燃火はすう
 見ると又お母のり何とくけつと居張りと走来と膝ととる環と
 と同より又親もあがり出環が顔と見脊と松共と涙又咽ぬま城
 形と見るより三人の款と懸めくけ方と精と在り大聲と活とる
 両親の悦ぶと限るく小けるの絹を衣と着りて京師の高賈と
 るが三年の衣と衣の帯と貨物と細くわらわらる長女と娘親と

怨家の婦女教人と伴く最上人信とゆは又長女と賊と奪と
 他家の婦女と伴ひたまは又ももあへんととせお捨くゆ京と
 一が恩愛の情業難く再びおつとるもやあへんと家ととて
 管は花も又婦相伴るの中國筋と尋問と更より同國より
 善く回つて再びお地とゆり来りし時又杉整し諸林法
 佛の意護ありとくきりの再会とるは又生蓮の喜び何れと
 去りてんれくも長女が抽るくと嫌ひ捨れば亦又妻とりて今
 より系初よりなり免も南も世話は只しとてい入く若くは
 右をた人の衣よりよりと青雲の糸も絶るお波は船とゆる公地し
 教とたより後食お首お船と求り帆と張く難波はけしてを乞
 繪本孝感傳卷之四畢

